

おおきみ (天皇) を支えてきた大伴氏の最期

令和2年3月2日 横浜歴研 高野賢彦

1、はじめに

大伴氏という豪族は一体どのような存在だったのでしょうか。大昔のことはどこまで信じていいのかわかりません。天孫降臨の一族であるという説もありますが、おそらく日本列島古来の住民であり、例えば天の岩戸神話で天照大神を引き出した手力男命たじからおのみことは祖神だったのかもしれませんが。ただ藤原不比等が大きく関与していると思われる『日本書記』(720)は大伴氏の遠祖を天忍日命あまのおしひみこととしております。

また大伴氏は同族の久米氏・佐伯氏らとともに日本武尊に従って蝦夷の鎮定など日本各地を動き回ったという説もありますが、大王側近の親衛隊として軍事・警備の担い手として仕えてきたものと思われます。軍事といえば物部氏も似たような立場にありましたが、大王との側近度が大きく異なっていたようであります。大伴勢の誇りは高く、先祖代々の忠節を称えて、しばしば久米氏が酒宴のときなどに歌った久米歌を高らかに歌い、また久米舞いを踊ったようであります。

久米歌では大伴氏が琴を弾き、佐伯氏が剣を持って舞いました。因みに乙巳いつしの変(645)で蘇我入鹿を殺害したのは佐伯氏だったという説もあります。奈良の大仏開眼供養(752)のときにも久米歌が唄われております。久米歌にもいろいろありますが、我々にもっとも馴染みがあるのは「海行かば水漬く屍かばね、山行かば草生す屍、大王の辺こそ死なめ・・・」(昭12信時潔作曲)という歌であります。

一説に大伴氏の祖・道臣命みちのおみのみことは神武東征のとき大活躍をし、また中興の祖と言われている金村の時代は大伴氏の全盛期であり、跡継ぎがいなかった武烈天皇の後の継体天皇の擁立(507)、筑紫の磐井の乱の鎮圧に力を尽くしたと言われております。ただ欽明天皇の時代に任那4県を百済へ割譲したことを物部尾輿もののべのおこしに咎められて失脚し、それ以後は蘇我氏の勢力下で逼塞ひっそくしていたようであります。

その後のこと、天智天皇のとき日本・百済の連合軍は白村江の合戦で唐・新羅の連合軍に敗退(663)しましたが、家持の大伯父御行みゆきをはじめ大伴勢が壬申の乱(672)で大活躍をし、御行が大海人皇子(天武天皇)の偉業を称えて「大王は神にてませば赤駒の腹這う田居を都となしつ」(万葉集巻19-4260)、「大王は神にてませば水鳥のすだく水沼みぬまを都となしつ」(19-4261)と詠って復活しました。

壬申の乱のとき藤原鎌足はすでに死亡しており、次男の不比等はまだ若かったので乱に巻き込まれずに済みました。不比等はその後の持統天皇のとき制定された大宝律令(701)の下で藤原氏独裁化への礎を築きました。そして不比等の子、武智麻呂ら4人は左

大臣長屋王（天武天皇の孫）を自害（729）へ追い込んで平群（奈良市西部）へ葬りました。そのとき長屋王と親しかった家持の父旅人はすでに太宰師だざいのそち（いわば外務大臣）へ左遷されていました。

2. 大伴家持の家族の状況

大伴氏は五世紀以降、多くの高官を輩出しました。大伴室屋むろやが大連おおむらじを称し、六世紀にも大伴金村が大連を称しました。家持の祖父安麻呂（御行の弟）、父旅人は大納言になりましたが、旅人が太宰師のとき「長屋王の変」が起こり、それ以降は藤原氏の勢力が圧倒的に強くなりました。

家持には祖父の安麻呂、父の旅人、弟の書持ふみもち、そして子の永主ながぬしなどがおりました。祖父安麻呂は橿原の佐保地内に屋敷を持っていましたので「佐保大納言卿」と呼ばれていました。また父旅人も太宰師に任命され、天平2年（730）に帰京しました。しかし同年7月、家持が14歳のとき67歳で死去しました。旅人の妻である大伴郎女いらつめは家持兄弟の実母ではありませんが、彼らの少年期の養育に大きく関わっていたようであります。

大王の宮城（大内裏）には十二の門があり、そのうち大伴氏が守っていた門は大伴門といわれ、それは後に朱雀門と呼ばれるようになりましたが、引き続き大伴氏が守っておりました。大王側近の家持は天応元年（781）8月に春宮とうぐう（東宮）大夫だいふに就任し、母の憂い（死）によって一旦解任されましたが、その後復位しております。家持はそのとき64歳なので母はかなり高齢だったと思われます。

また家持の正妻は『万葉集』に11首が載せられている坂上大嬢さかうえおおいらつめであり、大嬢の父は大伴宿奈麻呂、母は坂上郎女いらつめであるので家持と大嬢はイトコ同士であります。そして家持には妻おみなめがございましたが、天平11年（739）6月ごろ死亡しました。家持は深い哀しみに沈み、「いまよりは秋風寒く吹きなむを いかでかひとり長き夜をねむ」（3-462）と詠んでおります。

また妻との間の子永主は延暦3年（784）正月に正六位上から従五位下に、同10月には右京亮うきょうのすけという要職にありましたが、翌4年に起きた藤原種継たねつぐ事件（後述）に連座して隠岐へ流されました。

弟の書持はイトコの池主と行動を共にすることが多く、家持が亡き妻を想って悲しみの歌を詠むと、これに応えて「長き夜をひとりやねむと君がいえば 過ぎにし人の思ほゆらくに」（3-463）と詠んでおります。しかし天平18年（746）秋、家持が越中赴任後間もなく死亡しました。

その後のことではありますが、御行の後裔の伴善男ともよしおが貞観8年（866）に左大臣みなもとのまこと源信（嵯峨源氏の祖）を追い落とそうとして起こした「応天門の変」という放火事件の犯人

であると断定されて伊豆へ流されております。

3. 家持 越中など各地へ赴任

天平 18 年（746）6 月、独り身の家持は越中守に任命されました。越中には郡が八つあり、国の等級では上国にランクされておりました。越中守任命は文官人事を仕切っていた藤原仲麻呂の意向を反映しているようですが、体のいい左遷でありましょう。

家持は越中守として 5 年が過ぎた天平勝宝 3 年（751）7 月に少納言へ昇任、いよいよ帰京することになりました。その翌年 4 月 9 日に東大寺大仏の盛大な開眼供養が行われ、家持も参列しました。そのころ家持のイトコの大伴古麻呂が遣唐副使として唐へ赴き、天平勝宝 6 年（754）正月に帰国するとき揚州で偶然にも鑑真和上に出会いました。6 7 歳の鑑真和上は 6 回目の渡海でようやく来日、その翌年東大寺戒壇院で授戒を行い、7 2 歳のとき唐招提寺を造っております。

天平宝字 2 年（758）6 月、家持は因幡守となりました。藤原仲麻呂を排斥しようとする「橘奈良麻呂の変」に加担しなかった家持は、あるいは従四位に推挙されるものと期待しておりましたが不首尾に終わりました。官位の面から見れば、因幡守は左遷ではないとされておりますが、送別会のとき家持は「秋風の末吹き靡くはぎの花 共に挿頭さず相か別れむ」（20-4515）と寂しげな歌を詠んでおります。やはり左遷だったのでしょう。

天平宝字 3 年（759）の元旦、家持は気を取り直したのでしょうか、因幡の新春に当って「新しき年の始めの初春のけふ降る雪のいや重け吉事」（20-4516）という見事な歌を詠み、『万葉集』の最後に載せております。そして天平宝字 6 年（762）正月、家持は淳仁天皇のもとで侍従となり、宮中の礼儀や詔勅の文案審査に当たっております。

この年 5 月、淳仁天皇と孝謙太上天皇が不和になると、12 月に藤原仲麻呂（恵美押勝）が同じ藤原でも式家を排除、家持はこれに同情したためか官位を干され、天平宝字 8 年（764）正月から 8 か月の無官生活を経てようやく薩摩守となりました。これは左遷かもしれないが、太上天皇と弓削道鏡の事件に巻き込まれずに済みました。

ところが仲麻呂は道鏡を排斥するために軍を起し、失敗して琵琶湖の船上で死去、ときに 56 歳でした。そのため太上天皇は仲麻呂のことを父と呼んでいた淳仁天皇を廃し、自ら重祚して称徳天皇となりました。

道鏡は天平神護元年（765）に最高権力者になりました。一方、家持は 8 月に太宰少式として太宰府へ赴き、その後は伊勢守を経て宝亀 8 年（777）正月に正四位下となり、参議への道が開けてきました。天応元年（781）4 月、家持は春宮大夫を兼任し、間もなく

天武天皇系に牛耳られていた天智天皇系の桓武天皇がようやく即位して弟の早良親王を皇太子の位に付けました。

4. 家持 多賀城に死す

その後、家持はついに従三位に昇進し、延暦元年（782）6月に陸奥按察使鎮守將軍を兼任しました。そして延暦3年（784）2月には「征東將軍」となり、蝦夷を討つことに格別の熱意を持っていた桓武天皇から節刀（天皇権限を代行する意味を持つ刀）を授けられ、いよいよ多賀城へ赴任しました。

【多賀城】壺の碑。重要文化財。JR仙台駅から多賀城駅までの距離は13キロm。多賀城址までは駅からタクシーで10分。江戸時代に松尾芭蕉が多賀城碑を「日本中央碑（青森県東北町所在＝一説に蝦夷の国の真ん中である碑）」と誤解したらしいが、壺の碑は元々日本中央碑のことだったのかも知れない。多賀城碑には次のことが書かれている。正面には「京を去ること1千500里、蝦夷国の界を去ること1百20里、常陸国の界を去ること4百12里、下野国の界を去ること2百74里、靺鞨国の界を去ること3千里」など。また西面には「此城は、神龜元年（聖武天皇時代の724）歳は甲子に次る、按察使・兼鎮守將軍・従四位上・勲四等大野朝臣東人の置く所なり～」～天平宝字6年（淳仁天皇時代の762）12月1日。



しかし家持は延暦4年（785）8月28日に多賀城で死去しました。それから1か月ほど後の9月24日に、桓武天皇がご執心の長岡京造營の中心人物である藤原種継（藤原式家の出で天皇に皇后を嫁がせている）が暗殺されました。家持はこの暗殺事件の首謀者とみなされて死後20

日余り立っても葬儀をしてもらえず、それどころか隠岐島へ流されて遺骨は21年の長きにわたって留め置かれました。

ところが桓武天皇は淡路島へ流した早良皇子の怨霊に悩まされて不予の状態に陥り、

家持らを赦免して復位させました。そのため家持は21年ぶりに蘇ることができましたが、桓武天皇は勅を発した日に崩御されました。

家持は死して島流しにされるなど数々の事件に遭遇しましたが、一説に『大伴氏鎮魂の歌集といわれる万葉集』（藤原氏に対する恨みであろうか）の編纂に深く関わったのは家持が因幡の国から都へ帰り、多賀城へ赴任するまでの間（20余年）と言われております。

家持自身は天平宝字3年（759）まで、すなわち16歳のときから42歳までの間に479首を詠みましたが、因幡で「新しき年の始めの初春のけふ降る雪のいや重け吉事」という美しい歌を詠んだのを最後に歌作りを止めてしまいました。

家持は藤原仲麻呂の歌も『万葉集』に採録しておりますが、思うに藤原氏との覇権争いに敗れてお家が傾き、心の底では没落してゆく名門貴族の行く末を無念に思い、その哀歌として『萬葉集』編纂に携わったのではないか、と思わずにはられません。

いろいろ述べましたが、大伴氏は多くの事件でことごとく負け組に属していました。

伴善男が「応天門の放火事件」で流罪に処せられましたが、その後は

大伴弟麻呂；坂上田村麻呂の下で蝦夷討伐に参加しております。

大伴国道；藤原種継事件で佐渡へ流され、のちに帰京して「大伴」から単なる「伴」姓へ改名しました。それは淳和天皇（大伴親王）の諱いみなを避けるためであった。しかし国道は陸奥へ赴任して現地で死去しました。

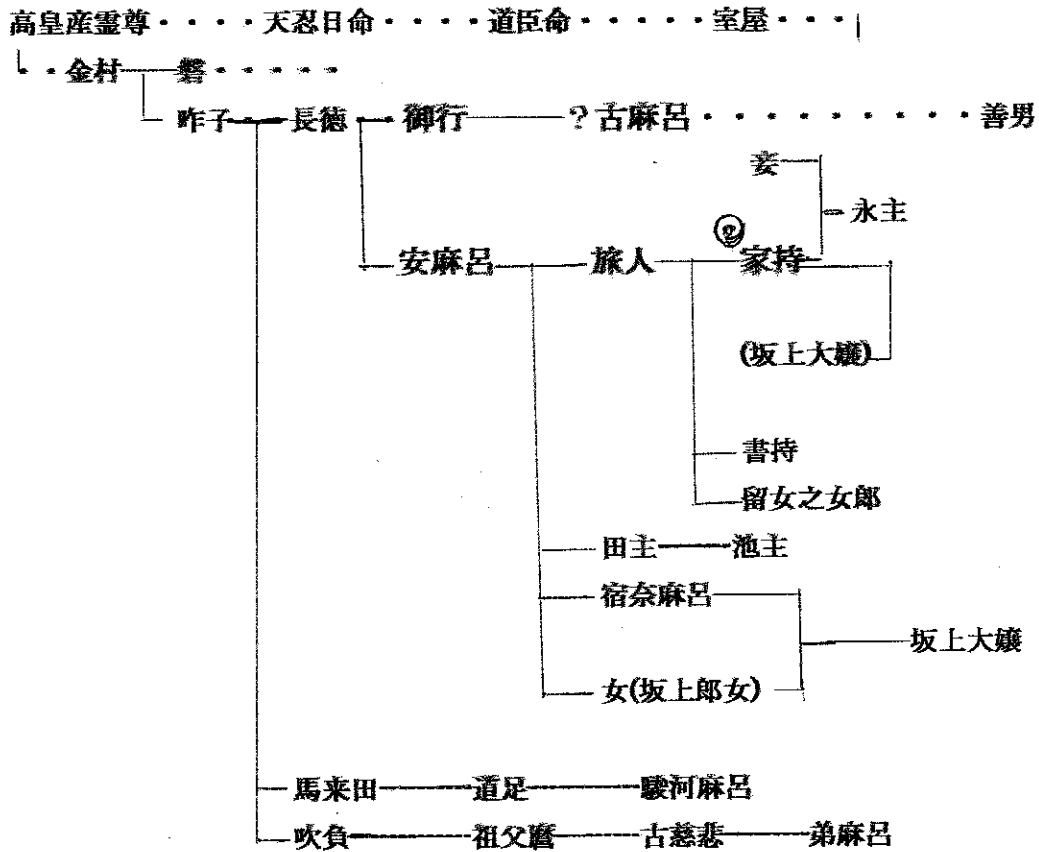
伴健岑こわみね；承和の変（842）で首謀者として隠岐へ流され、橘逸勢は伊豆へ配流される。藤原良房の謀略であろうか。

伴保平；天慶2年（939）にようやく公家になったが、間もなく死去。

戦国時代の滝川一益、池田恒興、ひょっとしたら織田信長などが大伴氏の後裔？

全国に大伴氏を称する人々は大勢いるが、家持の大伴氏とは無関係の人々が多いようです。（完）

大伴氏の系図の一例(系図概要・・・?)



参考・引用文献

『大伴家持』 波乱にみちた万葉歌人の生涯	藤井一二著	中公新書
『大伴氏』 列島原住民の流れを汲む名流武門	室賀寿男著	青垣出版
『古代氏族の系譜』	溝口睦子著	吉川弘文館
『万葉集』 隠された歴史のメッセージ	小川靖彦著	角川学芸出版
『大伴家持』	廣澤虔一郎著	叢文社
『大伴氏の正体』 悲劇の古代豪族	関 裕二著	河出書房新社
『万葉集が暴く平城京の闇』	関 裕二著	小学館新書
『古代史 封印された謎を解く』	関 裕二著	PHP研究所
『萬葉集 時代と作品』	木俣 修著	NHKブックス
『大伴家持 人と作品』	中西 進編	桜楓社
『大伴旅人』	中西 進編	祥伝社新書

以上